



「東京・下町・町工場の挑戦」

～時代の変化に対応する企業力～

株式会社浜野製作所 代表取締役会長 **浜野 慶一 氏**

2026年5月20日（水）、株式会社浜野製作所代表取締役会長の浜野慶一氏をお招きし、「東京・下町・町工場の挑戦」～時代の変化に対応する企業力～と題して、オンライン講演会を開催しました。

浜野慶一氏は、町工場・浜野製作所の二代目社長に就任後、製造業でありながら「おもてなしの心」を経営理念に、さまざまな業界・業種の「モノづくり」の課題・解決をサポートされてきました。

オンライン講演会では、先代急逝に伴う突然の事業承継をはじめとした困難への対応、事業変革の転機となったエピソード、未来の「モノづくり」への対応、人材育成への取組み等についてご講演いただきましたので、今回はその講演内容をご紹介します。



公益財団法人 七十七ビジネス振興財団 主催

【オンライン講演会】

配信日：2026年5月20日（水） 13：30 ～
5月26日（火） 17：00 まで

演 題： 「東京・下町・町工場の挑戦」～時代の変化に対応する企業力～

講 師： 浜野 慶一 氏 （株式会社浜野製作所 代表取締役会長）

私の父は福井県越前町出身で東京へ出て参りまして、大田区で量産部品をつくる金型づくりの職人として、1978年株式会社浜野製作所を設立いたしました。

父が社長で、母が経理をしながら工場の手伝いをしている自宅兼工場の典型的な町工場でした。

1993年、創業者の父は病気で亡くなりまして、私は29歳の時、家業へ戻り、社長に就任いたしました。母が創業以来、父と仕事をしていたので、母を師匠代わりとして仕事を教えてもらいながら経営を承継しましたが、その母も父が亡くなった2年後に亡くなり、その時にいた高齢の職人も退職し、私1人だけという時期もありました。

その後、量産部品を手がけましたが、モノづくり企業をとりまく環境は刻々と変化します。ひとつはITインフラの進展、もう1つは宅配便のようなデリバリーインフラの整備。これらによって目に見えない競合他社が沢山出現して参りました。そうすると下請型の部品加工業でやっていくことは、だんだんと難しくなってきました。

■ 自宅兼工場が焼失、即座に仮の工場を手当

2000年に、自宅兼工場が全焼してしまいました。その時、私は火に包まれてゆく自宅兼工場を見つめながら、なぜかふっと頭に浮かび思い出したのは、小さい頃に聞いた亡き父の声、「お客さまに迷惑をかけて発展成長する商売は一つもないんだ」という言葉でした。私はすぐに貸し工場と設備探しを始め、仕事をすぐ再開すべく、当時たった一人の従業員と、毎日、夜中、土日祝日もなく働き、4千もある金型を一つずつ煤払い、さび落としをして、仮の工場仕事をなんとか再開しました。

この時の火事の原因は近所の解体工事中のガスバーナーによる鉄骨切断の際の火花による引火が原因でした。工事の発注者は当時の東証一部上場の住宅メーカーで、6千万円の補償額が提示されました。私としては、工場だけでなく家族との思い出も全て無くし6千万円では到底納得できませんでしたが、ずっとついてきてくれたたった一人の従業員に給料も払えない状況でしたので承諾しました。しかし契約の前日に、その住宅メーカーが倒産したというニュースをテレビで知りました。ずっと一緒に頑張ってくれている従業員に、「もう今日は帰って、少し身体を休めてくれ、また必ず連絡するから」と伝え、私は、すぐにその住宅メーカーへ向かいました。

倒産した住宅メーカーの会社には当然ながら入れず、同じく被災にあった方々も集まっていました。その方たちと今後についての話し合いをし、その日は夜中の1時過ぎになってしまいました。私は疲れているにもかかわらず、なぜか自宅へ戻らず工場へ戻りました。すると、とっくに帰っているはずの従業員が夜中に一人で、ずっと金型のさび落としをしていました。その背中を見て、「もうやめよう、この会社の後始末は俺一人でやるから、もう他の会社へ行ってくれ、今までほんとありがとうな。」と伝えました。

そうしましたら、その従業員は、「私はお金のために働いているんじゃない。あなたと仕事をしたいからここにいます。浜野製作所はまだつぶれてませんよ!」と言うのです。身体も心も限界を超えていたそんな時に、そう声を掛けてくれました。その時、私は「一緒に働き続けている従業員に必ず還元できる会社になる。それが最大のご恩返しだ。それが小さな工場の社長が何としてもやらなければならない仕事なんだ」と覚悟が決まりました。

■ 「ものづくり大賞」を受賞し、行幸の栄を賜る

火事の3年後、2003年、私どもはどこの団体にも加盟しておらず何もない会社でしたが、墨田区の「フレッシュゆめ工場」モデル工場の認定を受けました。いずれは優良工場になってくださいという区のお考えと思い認定を受けました。

2018年には経済産業省「第7回ものづくり日本大賞」の経済産業大臣賞を受賞しました。モノづくり関連企業を顕彰する賞としてはおそらく最も権威のある賞ですので、大変名誉なことです。

そして同年6月には現在の上皇陛下である平成の天皇に行幸をいただいております。私が工場をご案内申し上げたのですが、「何か希望がありますか」とおっしゃっていただきましたので、「工場で頑張っている職人とお話をいただくことはできますか」とお尋ねしますと、「喜んでお願いします」とのお言葉でした。お茶をお飲みいただきながら職人と懇談していただいて大変光栄な機会をいただき、本当に素晴らしいことで、感動して涙が出そうになりました。

また翌年2019年、浜野製作所は世界の中小企業の中でも先進的な取組を行っているということで国連本部から招待を受けて、自社の技術力と産学官連携の取組事例を報告いたしました。

■ 事業変革への転機 「ありがとう」と言われるモノづくりへの挑戦

最初にお伝えしました通り、創業当時の浜野製作所は請負型、下請け型の部品加工の工場でしたが、現在は売り上げの8～9割が、開発系、装置開発、ロボット開発となっております。そのきっかけは17～8年前になりますが、まだ従業員が5～6名の頃でした。最愛の5歳の娘さんが交通事故で半身不随になってしまった父親の方から、いま使っている介護ベッドを改造してリハビリ用の金具のパイプを作って欲しいという依頼でした。しかも納期は、そのお嬢さんの誕生日、1週間後です。

事情を聞くと、購入したベッドメーカーに、リハビリ用にオリジナルの金具が作れるかどうか、何ヶ月も前から依頼をしていましたが、ギリギリになって結局断られてしまい、お嬢さんの誕生日の1週間前に焦って私どもへ連絡をいただいた次第でした。

私はそのお父さんの気持ちが痛いほど分かり、なんとかしてあげたいと納期通り、1週間後に、金具の部品をお送りすることができました。

そして、そのお父さんから、お礼のメールが届きました。

お嬢さんから、「パパありがとう、本当にありがとう」、と言われ抱きつかれたそうです。そしてメールには、私どもへのたくさんの「ありがとう」と、感謝、感謝、感謝の言葉をいただきました。こんな小さな会社でも人から感謝される製品づくりができるのだと思った瞬間に、これからは「ありがとう」と言われる仕事をしようと思えました。また、弊社が開発製品を手がけようと考えたきっかけともなりました。

現在、従業員数は60名、アルバイト学生が5名、外部からの出向者が5名で、丁度70名と、小規模な工場です。施設は主に企画、設計・開発、精密板金を行う本社工場を中心に近隣に5つの工場を構え、スタートアップ企業を支援する「Garage Sumida」の他にベンチャーラボをひとつ立ち上げておりまして、合計7拠点でモノづくりにかかわる仕事をしております。

最近ではロボット開発や装置開発、設計開発などモノづくりを核としながら、コンサルティングにも展開しております。私どもの経営理念にそぐわないものは一切やらないというのが基本方針です。

火事の3年後、決まったわが社の経営理念です。

**「おもてなしの心を」常に持ってお客様・スタッフ・地域に感謝・還元し、
夢（自己実現）と希望と誇りを持った活力ある企業を目指そう！**

■ 情報にコミット、地域のネットワークをつなぐ

浜野製作所が現在考えている3つの方向性について、お話いたします。1つ目はモノづくりにおける情報の上流からのコミットメント、2つ目は下請体質からの脱却、3つ目はネットワークの活用です。

1つ目の情報の流れから申し上げますと、モノづくりの流れは、「相談」「設計・開発」「試作・検証」「量産加工」「組込・組立て・検証」という流れでいくことが多いのではないかと思います。経営者としてはやはり量産の仕事をしたいという方が多いと思います。しかし、量産の工程は生産拠点が海外に移り、単価も下がっています。東京などであれば騒音などの問題もあり、工場の稼働率も低くなります。これでは国内と海外双方の企業に太刀打ちできません。しかし、視点を変えれば、モノづくりの考え方や枠組、仕組を変えることでメリットにすることができるのではないのでしょうか。弊社の本社工場の2階には先ほど紹介したGarage Sumidaがあります。無駄な施設のように見えますが、東京の墨田から発信することを目指すものです。

2つ目は下請体質からの脱却です。下請は誇り高い仕事ではありますが、その体質から脱却していかなければならないのではないか、ということです。3つ目のネットワークの活用でいえば、私どものような小さい工場はできないことが多く、機会損失も生んでいます。しかし、強みを持った地域の会社と組むことで、できないことができるようになり、今まで見えなかった景色が見えてくるのです。

墨田区と早稲田大学は2001年から産学官連携事業を開始し、技術開発やまちづくりなど幅広い分野で相互連携を図っています。この連携に伴い、弊社と早稲田大学との産学連携の活動を始めました。その成果のひとつが次世代型モビリティシステム「HOKUSAI」です。企業規模を越えた弊社のネットワークの例を上げると、設計開発ではブリヂストンや富士通と、研究開発では東北大学や東京科学大学などと研究開発を進めています。

■ わが社の人材育成への取り組み

弊社には板金や加工の職人はおりましたが、開発のエンジニアはおりませんでした。人材を育成するには外部から採用するか育成するかのどちらかです。お金がないので、経験を積んでスキルを磨いていく道をとりました。従業員の教育訓練には積極的に投資をしています。

深海探査艇「江戸っ子1号」開発プロジェクト、配財プロジェクト、アウトオブキッツニア（職人体験）等、様々なプロジェクトに携わり、手掛けてきました。

こうした連携によって高度な人材が集まるようになり、今では大学卒や高専卒の優秀な人材の採用が可能になっています。

これからも様々な業種の人たちと連携を取りながら、新たな価値を創出して市場をつくっていくことが、浜野製作所の事業であると考えております。



浜野 慶一(はまの けいいち)氏 プロフィール

東京都墨田区出身。創業者の突然の死去に伴う事業承継、社長就任後の工場火災、下請け業の厳しい現実といった困難に直面しながらも、様々なプロジェクトに挑戦し成長してきた町工場浜野製作所の二代目社長（現会長）。「先端都市型ものづくり」として注目される同社は、ものづくり日本大賞経済産業大臣賞受賞や国連本部での事例報告など、国内外から大きな注目を集めている。